



碗久松山物語

義碗久傳奇
七部五冊
安井

~13
3916
1



門へ13
號 3916
卷 1

精工佳紙



全本五卷

曲亭主人
馬琴編
一勇齋夫
國芳畫



叙 識者論蒙昧也。宛然類醫
之 療疾病焉。子輿曰。性善也。
然 其有所昏迷。強為不善者。
猶 人而有疾病矣。若夫大人
君 子。乃學之。有正經存也。固
不 俟予言矣。只草野兒女輩。
其 所昏迷者。衆矣。將何以導
之。 以予觀之。莫若小說。小說

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

之為書。雖事係奇。恠詭譎。大
要在以勸善懲惡為主焉。奇
恠詭譎。其變百出。兒女子所
以悅赴。由其所悅赴。而導之。
使以躋於善良之域。乃諷諭
薰釀之攸化。遂以得一覺昏
迷。則小說之功。豈詹々哉。然
則不可謂無裨於正經矣。大
抵兒女臨觀。勾欄演劇。尚遇

善良。狀則扼腕。遇奸兇。熊則
不平。是匪其性善。得天賦。奚
得令然。碗父話說五卷。東都
簞笠翁所作也。其文奇警。雄
渾。酷為可見焉。蓋稗史氏之
能紀述人事。雖挿入許多浮
沈。轉倒之態。而於其結局也。
乃不過奸兇罹報。殃善良。錫
應福。以為一大話柄而已。譬

猶醫之得證候。而以君臣佐
使。立一藥方也。可見治疾病
與論昏迷其致。乃亦一般矣。
乃以之為序。
文化丁卯小春
大阪 馬田昌調撰



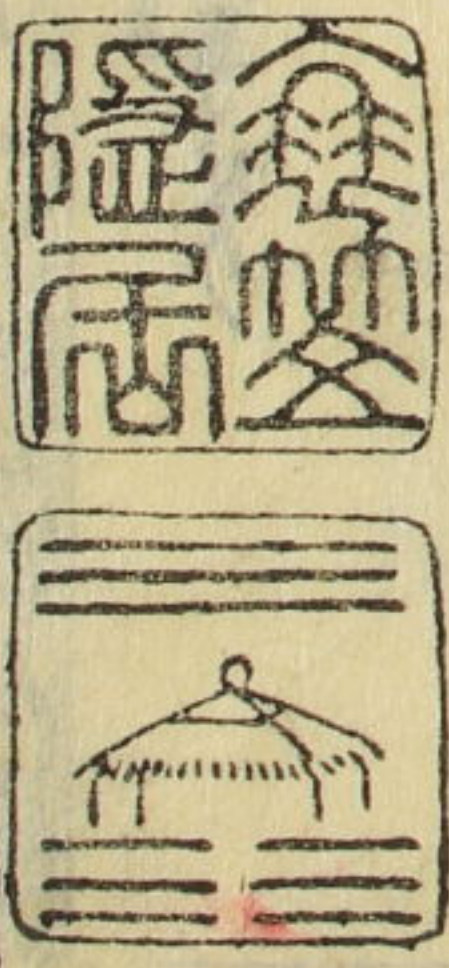
海山院 院之

海山院
院之
院之
院之

碗久ハ伊勢入ナリ家号ハ碗屋字ハ久右門後浪花ニ來テ猫間川ノ
 西林城ノ南門外ニ處其家碗盤等ノ漆器ヲ鴨南ヲ以碗屋下号蓋
 碗久ハ略稱ナリ或ハイフ碗久丁年碗家ニ感觸シ遂ニ業ヲ廢シ産ヲ
 破リ故御ニ歸テ没ス今猶伊勢ニ碗久が墓アリ亦寄進ノ水盥浪花
 某院ニアリ浪花青樓志ニ云碗久トイフ別人アリ艶曲ノ小歌ニ
 作シ碗久ハ瓢葦カシクヲ附會セリコノ瓢葦カシクハ豪家ノ
 果ニテ散髪法衣偏祖右肩ノ打扮シ杖頭ニ瓢葦ヲ結着
 門々ニ立テ乞食ス人彼が其門ニ立在ヲ見テ通レトイハハ何
 通レトハ君トイヒツ裡ニ入り輕口セリフナドヲイヒテ生活トセシ
 モノナリ又除夜ニ茨屋長左エ門ガ樓上ニテ散豆セシハ玉屋

庄七トイフモノナルヲ彼此撮合シテ碗久が事トセシハ演戲作
 者ノ滑稽ナリ以上按ズルニ愛敬昔男自笑ニ瓢葦カシク四條河原
 ニテ俗談ヲナスノ圖見エタリカシクハ佛説ニ猖狂輕脱ノ辨ヲマ
 ジヘテ人ヲ笑セシモトオボシ近時東都ノ志道軒似タリ予今
 碗久カシクヲ一人トシ更ニ其名ニ嫁シテ柳巷話説五卷ヲ
 作ル亦是事實ヲ考ルニ足ラストイヘ氏專勸善懲惡ノ筆ニ
 操ヲモテ那雜劇ノ脚色ト同カラス因テ深窓ノ小姐市井ノ
 老婆閑シテ一日ノ戲場ニ換テ可ナリ丁卯夏肆月識ス

江戸 簞笠隱居





山うら
身おろ
夕貝の者
うま

蒸婆々



筑此
うま
うま

松山大夫

ひろえとと神号
碗久



吾觀諸法

譬如幻

總是

衆緣

所

合

見
碗久
母



好士八太郎

惡漢

團

直六

平の

總目録

- 服部輔次祈觀音擧子
- 錢懸松團平欺妻賣子
- 豊久野悪棍殺其友
- 有馬温泉常花締姻縁
- 妬婦舊魂温泉憑苑石父子
- 野崎浪華津逢古主
- 感奇耦碗久惑弱松山
- 長堀橋碗久脱偷難
- 貪婪婆殺子比金於土塊
- 爲仇野養有無父逢父良家

松山柳巷話説卷之一

東都 曲亭主人 編次

服部輔次祈觀音擧子
 伊勢國安濃郡掠木の御い安濃の松原を通じて赤宮の順路
 多々しくハ旅客の往還途強者隙多くて世々より便宜の地なりん
 田舎の似げき商人更々中服部輔次といふものありなり原ハ
 當所の御士より父祖の時よりハ兩刀を帶へて家ハ究て貧しうり
 ぼるに捕入ハ公なる賤しう商人の毎日金銭をより扱入を羨み父
 母をまうりて後ハ後をみるく武士を棄て此の田園を沽却しこれ本
 錢で難貨店を開設當國の名物伊勢綿の布花井の紙衣川崎

出又川上茶すべて推くの物産を賣南さ次第に發跡く小厮二三人を
 使ひよるの之くくらずるに足らざることとを言ふれば飯の糧を
 食ひ衣の蔽ふるを厭はず願ひを以てはたす人とは宿まてすもの利を
 射んとせしむる人その吝嗇を疎ざらざる。あつに捕ゆが妻を
 志井と名ひておまへ御ある農夫市平といひのめく妹ありとの志井が
 十二の秋兄市平黄疽を病て全體黄と半羊のまら農業をなさず
 家より老母と之の親子三人餓え遍りくバ密に母と合して
 洛六條の柳巷より為と賣との力價とめて危窮を濟ひしふど。
 市平八次の年の春病中愈えりさのめ母ハあうに志井がより子
 る隙多く彼千載集り 甲斐りて是行都のくこの後くまよりいぞ後ひ

てん志井の水とよもくも。今うかうかといひる中一年をたて世を
 去ぬ市平ハ母のくうの悲さうゆくと妹とふ便くあひて羊季の
 充るをまらうつ元来市平と捕ゆ乳兄身あるとて互に親の
 交参ぬさるふよとて捕ゆが活業のぬにをりく洛へ上るとあはれ
 言傳て妹が安否を問くは簡るを挑遣るもあはれくよりくても捕ゆ
 一路の柳を招く是て風流の藪澤に迷入りのあらねど志井ハあうかう
 故々人のまうりて彼人の坊あ毎に酒飲くまてぬくはと法
 志井ハ十年のまの年季充くと兄が家へ帰ると居るとら捕ゆ熱
 思ひあうこと壯年とらるまて妻とあも娶らざるハ是彼の雜費を
 厭へばるるに彼志井ハ且く流是の里よりて河竹の世をこころ

此を以て浮く方より心と定めず。人の妻となりて親の懐子より勝
 る。市平兵衛竹馬の女あり。彼亦富のゆゑにわづらふ。妹
 を娶ふ。死に一縷の錢を費ふ。及ぶと深合し。媒も固らざり。と
 直に後合し。夫と志井と妻する。一りげに捕々かあつ。違ふ。志井
 けり。内を治て薪炊のるに心を用ひ。天のふく。熱ひて。母家の
 息長足姫よりとぞ捕り。くる。隙に。駒の鞭を俵す。て走る。
 早く捕々の年既。四十。る。びく。目睡の。曉る。老後の。る。る。と。ひ。か。た
 何。から。ん。物。の。足。ら。ざる。心。持。つ。の。日。志。井。に。り。ま。う。つ。ま。の。方。を。娶
 る。より。五。七。年。を。経。る。と。り。ま。も。子。を。り。の。ま。と。す。が。柱。行。女。の。果
 び。と。子。を。産。む。の。難。め。は。さ。ま。ら。う。ら。う。ら。う。と。や。千。の。財。宝。を

藏る。子。も。子。を。り。の。ま。と。す。が。柱。行。女。の。果
 人の。ゆ。ゑ。に。り。て。ん。む。り。て。當。國。奄。藝。郡。寺。家。村。今。の。觀。世。音。ハ。世。の
 子。安。に。稱。へ。靈。驗。固。く。揚。焉。堂。彼。寺。の。縁。起。と。ん。ん。人。皇。甲。子。代
 聖。武。天。皇。の。御。願。所。は。く。天。平。勝。宝。年。中。に。淡。海。公。の。建。立。す。り。婦。人
 の。妊。娠。を。祈。り。小。眞。助。美。又。境。内。は。播。磨。の。年。中。常。盤。花。の。園。と
 り。て。其。の。人。を。斷。接。と。稱。ふ。平。城。の。御。時。天。皇。の。樹。を。禁。庭。小。を。れ。ん。
 忽。地。一。夜。は。枯。ま。て。たり。帝。發。死。わ。が。一。七。舊。の。寺。遣。の。ゆ。ゑ。と。く。
 誓。の。ま。は。り。つ。も。指。し。さ。ら。花。の。人。と。や。常。盤。の。ら。ん
 枝。葉。又。繁。ら。も。花。の。咲。と。舊。の。如。し。る。ん。ら。め。て。死。其。場。を。ま。す。
 二。百。年。來。の。兵。乱。の。疲。ま。く。堂。宇。頽。破。ら。る。る。も。修。覆。し。進。ら。す。る

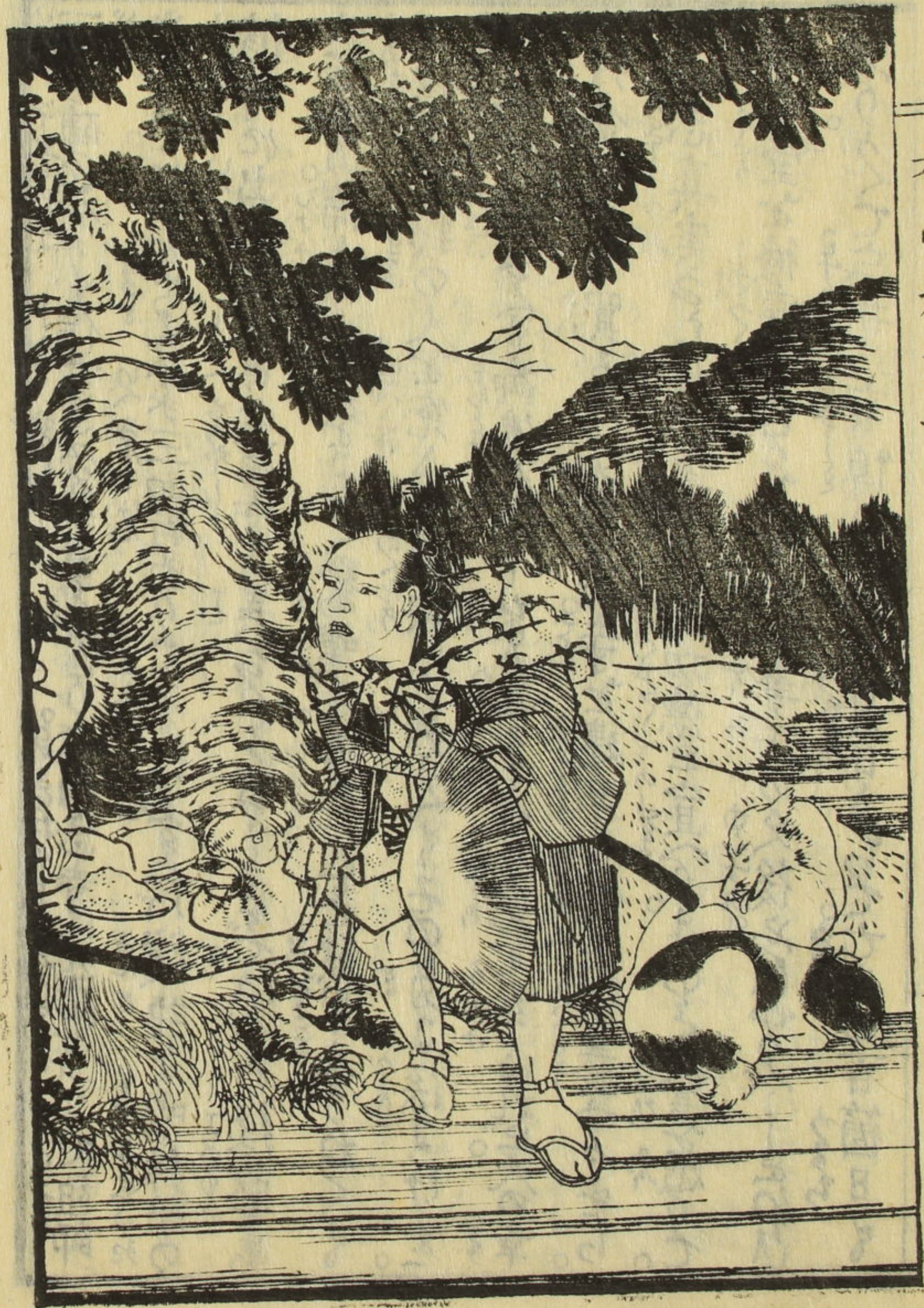
是ハ常花を養ハ料ヲ必ガ物ヲ不足ゾモク身ヲク_リ利ヲ射_ルト
ノ計較_シクバ子_ノ也_トモ_シトモ_シト_モ三年に及_ビると_モ不_レ耐_ル怨_ハシ_テ手_ヲ
ダ_リ寔_ニ人_ノ世_ハあ_ラむ_ルの_時蜂_ノ毒_ハ夕_ニま_リテ捕_ハハ_ハ一旦中_ノ風_ノ病
着_テ卧_シ偏_ニ拈_テ稿_ヲ茶_ノ餌_モ咽_ハズ_テ下_ラズ_テの_りる_るぐ_ある_る
志_ハ井_ガ愁_傷ハ_レの_もと_シラ_シ市_平も_走り_まる_る信_守ハ_着病_ハ
く_テハ_ク存_命べ_クも_コト_モえ_ズい_ハ送_スる_るも_わら_バる_らど_町
壁_ハ破_れり_テ捕_ハハ_ハ卧_シテ常_花を_リテ_落決_ル又_ハ金_錢を_秘
秘_シケ_テ塗_籠と_シテ_入つ_める_るの_時睡_昏ハ_息絶_れり_てあ_る
ぐ_ある_る市_平ハ_妹と_シテ_練房_ヲ野_邊送_リ形_ノで_テり_當り_て
あ_らむ_る二_里隔_リと_シテ_隔六_大院_村ノ_東に_在る_る冷_井山_西念_寺に_葬り_て

一_片ノ_碑ハ_何ノ_信士_と法_名と_シテ_あら_むる_る西_念寺_ハ空_也派_リて_祖師_ノ
堂_ノあり_てと_シテ_あら_むる_る家_三四_軒あり_て冬_ノに_もま_りテ_續語_と唱_鉢鼓_ノ
修行_ハ出_るる_る洛_ノ空_也寺_ハ異_るる_ると_シテ_あら_むる_る縁_故と_シテ_あ
ま_りの_捕ハ_ハ頓_死と_シテ_あら_むる_る鷲_嘆ハ_まじ_バと_シテ_あら_むる_る彼_男あ_らむ_るわ_らむ_る
各_牆と_シテ_あら_むる_る人_ト寛_シテ_あら_むる_る惡_報ハ_あら_むる_るも_コト_モの_力ハ_係り_けま_り
加_旃物_体も_御佛_と賺_シり_{たり}や_らむ_る女_兒を_奉これ_ハ人_ノ幸_ト
福_ハ金_錢と_シテ_あら_むる_るに_あら_むる_る寺_ヲ建_立ハ_僧を_供養_スる_ると_シテ_あ
その_志真_實と_シテ_あら_むる_るら_なバ_達磨_ハ無_功德_と宣_へり_{たり}と_シテ_あら_むる_る誓_言を_破り_て
観_音堂_を修_覆せ_らむ_ると_シテ_あら_むる_る彼_ガ妻_子ノ_父後_也ハ_あら_むる_ると_シテ_あ
ゆ_りり_て志_ハ井_ハ哀_悼の_らむ_る月_日と_シテ_あら_むる_る亡_夫ノ_百箇_日も



松山卷之一

十一



松山卷之一

果一々兄市平を招きよして後のもどきと都合するに市平が常
 常花のや三支にありて乳房がうすなるさびびののまのひま
 うく入夫せむいこの家と立ぐころらん婦の両夫にさあらいよろし
 筋ゆいゆらねど縦操と破つても服部の家と相續せむ亡まの對
 て影護とるゝ何事も兄よりうらねしゆいゆいゆいゆいゆいゆ
 ぬ工をせええののうらねしゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆ
 族もゆらぬの兄が棟を恃る工をせええののうらねしゆいゆい
 市平歡びてのうらねしゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆ
 居服部團平よりゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 を尋ねよえい相摸の人より武士の浪人服部何かが一子ありいと

なやぐより孤とるにようく商人の家は其所あめるの十五六年に
 かびいふ過世ありて親方の男上零落し妻子眷属も四落
 八落つるゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 由を従せりるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 程よ澄七美引とゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 にいひてくらく西念寺の食客とるゝもきろ今茲廿九歳ゆいゆい
 六ツ七ツ坊つとるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 たるゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 勤のゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 いひこの人あるべしとく彼澄七が媒妁するにさる縁よりゆいゆい

縁そのひく件の園平浦父が後家入夫しつ家業兼因之相續す
 忘井はそのもより前の夫が子安の觀世音に祈つて女子を奉け
 たる又彼本堂を修覆してとんと誓言をら願をもせぐ為まりり
 たるのを園平に物ぐる内なる人よりて寄進せしむるが彼堂
 宇を造りてとく之といふ園平はとて捨捨く死てゆめあまを
 しが新入夫して立地はそのるを起えい活業を為園するに似
 たり。今三三年まらその回へ金もあつた隨ふそのへと回答る
 忘井も強て勸ぐてとまらそまらく己より抑此園平の澄七が徒
 弟つものら鎌倉のあつた親方の金殿用費しこれ彼地を
 追放して彼此を徘徊して遂に伊勢に漂泊し豊之の澄七と假初

に交つるがその公ととを七よりね世長なるものるが西念寺に
 てせまける男のやとりのうつたを彼寺に遣し亦浦父が後家入
 夫すとてとくが媒約せが過分の辛苦銭をゆるのとら久後
 しがぬくゆらとて思ひて誠をうめいととら忘井と婚姻す
 たるあるんさうゆとて園平の母もぬらさむ浦父が名蹟を相續して
 半年のまりの老實な奉止るがその年の終りに至つて忘井が兄市
 平風のとらとてとら臥しつるより病つららんとて僅に七日をり
 ちく終つたがまらりくが園平今人憚るものるは是より活業の懈
 豊之の澄七に洲の苦六るどりのものと他をまらく交参つ酒を
 賭遊びし酒の三三年の回より上と篩果して小厮よりとら

ぶたのわらわらばい。ひまふのこころにまうして家をも入らぬはるまじ
掠本とまふまで。劍尾との隣御りさく申る。草屋と求め。門辺を
後背に圍繞らし。憩所とばす。燈籠を柱に懸。旅客の前後
を覆。親子三人申る。その日を送るに。女兒常花。今夕八女
より。顔色の整好あるの。こころにす。なま。怜。惻。入。ま。び。と。ま。が。茶。の。給
ま。す。を。し。と。ま。く。世。の。入。口。頼。了。頭。の。茶。屋。と。綿。号。せ。り。く
て。國。平。の。茶。店。と。志。井。の。ま。の。ち。あ。ら。う。と。家。の。し。も。居。ら。ず。例。の。悪。友
澄。七。若。六。と。あ。の。梅。本。日。を。費。し。使。ホ。に。錢。三。貫。を。借。る。の。信。と
の。と。交。る。ま。ら。ね。ば。親。一。た。も。似。げ。と。ま。を。債。つ。と。ま。が。も。俵。ず。國
平。八。聖。し。り。ひ。聖。去。と。延。し。く。の。ま。の。に。り。て。債。ら。ま。て。の。目。澄。七。若

六。う。の。ま。う。と。ま。う。た。活。物。あ。り。て。輒。く。十。兩。の。ま。の。の。分。六。獲。べ。く。ま。と
り。物。ま。ら。明。白。の。活。ら。ま。ず。汝。達。と。ま。を。助。け。て。如。此。く。ま。ら。ば。
立。地。の。三。貫。の。錢。を。返。す。の。ま。ら。ず。その。金。を。配。分。し。て。三。二。二。の。二
人。が。辛。苦。後。と。ま。ら。ず。その。故。の。箇。様。と。その。謀。の。如。此。く。ま。ら。ば。
額。を。の。り。耳。を。ぞ。り。う。り。と。密。結。ば。二人。の。悪。根。大。く。飲。び。ま。ら。ば。あ。る
せん。と。既。に。その。諸。号。を。定。め。ま。ら。ず。つ。ま。と。外。面。の。ま。の。目。志。井。の
朝。ま。に。常。花。を。ほ。び。起。して。床。几。を。扛。ま。ら。ず。茶。釜。を。沸。し
て。入。客。を。ま。ら。自。ら。ま。の。の。より。ぬ。く。ま。の。人。を。思。ひ。あ。り。て。親。子
ら。相。結。の。間。二。日。も。り。う。斜。う。を。ま。く。未。下。刻。ま。ら。ん。ん。武。士。も
ゆ。ず。商。人。も。あ。ら。ざる。旅。客。ま。ら。轎。を。扛。ま。ら。ず。と。志。井。が。茶

店の床几に尻を敷き二三碗の茶を喫しつゝ常花とぞんろろして後の
 驛家とてとふ了頭の茶屋とて名こゝる女の童のりを安しうが。
 うららふ想んとおひして来りしあけくまをて花香をさうらうら
 ぬ津國有馬とて藤松何たり湯折駈ゆりて湯治する旅客
 の宿するが活業るまは湯女も幾人あり又女の童も五七人のまじりて
 の女児のどけりこが御いさら之廣き浪津中もあつてさうらうら田舎
 ひとをを汲せし惜きとより石のう子を稱美らしきと傍ららぬが
 るて世の中の狂ゆるまは忘井もよそよ回答て常花今つ茶を連ら
 せよといわゆるも人駈散動て東の街へ走りぬくつと衆皆つ何言
 ぞまゝ端近う歩くつと忘井後まてるをなをそ何のつものめ

して忙しげく走るるぞと向ひ其入答く世の天なき奴もあつ
 のつらぬこのごろ夜まぐ錢松の銭を盗むつものつらぬ。こまどを
 守が捕へりて罵るふよろしく実言る虚言らんとて行きのさひ
 も思ひ喘々走去けり藤松とををばつと忘井に對ひその錢松と
 りつらぬつらぬ松とをといひつと忘井微笑していま縁起をまつりぬ
 づやらの劍尾の東なる曠原にらりける一株の松ありこの所は往古
 大神宮の行宮の蹟るまは古蹟をうらむつと標の松と
 裁て木の下の祠を建しとやん今この祠にうせて松のまはりて
 はんまゝこふ来りて大神宮を遙拜し松の枝に初穂の銭を掛て
 づつとめて沙松と稱けりさうらうら小掛する沙の数もさうら

ことばもついでにあらはれ入るに盗むはきまりの事良の
 念發りて彼沙を盗まんとするものさげ残り立地に蛇と変
 なくその人を逐はるるをぞ又彼沙を守るものありて銭と月毎
 本宮へ進らするも昔よりまじき事なりしをりある悪人の罰は宗
 省すはる徳慈をさへしりたるも憎むべし白後しとてさ
 に旅客主從古を巻て神威の灼然をうりて浩野に豊文野の座
 守澄七のりて園平を傳めまじりたる素の事とてまじき茶店の門
 辺引来るを御の老弱先は立後れ従ひりとうがまをう罵らる
 その時澄七忘井に對いこのごら銭掛おれぬら沙の夜まじ
 うするらるるらと不審ひひりる園平が心なるらと入建と

徳もついでに傳て縁由を責問は盗らる銭ハ都と十五貫
 わまらるるらとりのりごらららの夫婦に由縁ありのまれば他の
 夏の中うにりばささむらびと彼野をもちろがご職役あるに私に
 免へがご若立地は後を返されれば生座にせらまらんが痛一さうの
 門はむもさくおとままり阿嫂今の身にて六十五貫の残のゆ家
 るよかもむらごめまどさ六ハ親一は友うとてこののりげあるもの
 かりぬびよとて詮合しとまうくもさく救ひる人よ金とて人の仇を
 おひひをり。又舊の跡の引るせは衆人いるわん果んて後方に
 跟くがもたははは井にたごめより胸をうりて應もぬせ
 家の聲をうらり裡も入らさ引はゆく屠所のあゆみの



ひつ下田の穂がも蔭にのりえある夫の影と目送つて一声高く
 泣沈ぬ常花の推ごころにも物の善悪をいひあへん何とせん
 母はるうも養ふ救つてのいふとまるとせうの立戻る親子不覚の泪
 ろりおつもゆきと只六の鷲直にまのまの縁由の只今波ぬ阿嫂泣
 て居るをころにゆら子と返すの返しての園平の生るから縁落の
 底へ沈ぞくころが男の一人を世とていふ田園と活却して
 救ひぬきせんが女とての信るまでとあつてとく時録もまゝ常言に
 時の用より鼻も刺さるもの河津常花の憂をなせむの金の
 そのいよふもゆら子ゆら女児を賣んともうらぶ走つてまはつて
 媒すべしとく回答も人といふとせむ志井のいふとる落る涙を流す

押拭ひ悪入るまじも夫より十五貫の砂由多うとく殺すを殺さる
 きろあつゆいゆき子と賣ての過去ゆい一浦ぬぬの位牌に顔を
 向くてころが男十年ころのせむらとてび抑巷も男を賣て夫の
 先達と救んゆゆけと悔しき浦邊が箱もらるるゆいひるたけいお
 久らぬ年浪もりもやせまうらうくやせまうらと思ひくる人の氣もる
 常花の大人しく傾城をやらん遊女をやらんうらうらとて養ふ
 を救つてとるらば救ぐゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 他一阿婆さる阿爺さるが母のゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 ららうらゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 めい何となくゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

口説バ忘井膝引引りて伶俐なまばとと年々ささむと十の
足らぬ推見が三の年より養ひの意をあらく痛まや浮世の美
理にうらまきまその養父の縛をうんよまごに身と愛ハ世
稀るべき孝行なり。親とより子とあるも過世の因果を改くらし
真愛うらみの子の道と日來教ハ教ても母ハ却りひびく断と
くこれ愛をの伴ハ狂ふ意駒もろが子さならハ散とど果しるた
まむに子私すを苔六さるべく練とくらし遂に常花が身と
走り去らんとてとよりより旅客藤松いと口舌に立ちわたりつと
破居くると目今苔六が推見とねくゆんとするをうをく母を床
ルとをさすつと苔六とねくゆんとのまの橋列有馬の湯本めて後妻

湯の藤松と修りものあり。儻より縁故と貸し理するハ母の愁傷
健氣あるハ女の童の孝ひあり。たも憂るものるらばこれこの
常花とやらんを買て故御へおとく既るん浮舟の宿のひびきいぬ
まど懇に此世を離るる世とつととさすのハ大いなる親の恥
るり既るその孝ひとあるまばつと又父母にありうらりてとる
勤り養育へしるてうらるハ十五貫とやらん。こまに五貫を
あへ年季十八箇年に定め身價二十貫と通す。つとつと決
りたはゆゑ世のるるに過つりうら後合せんるらばとて筆書と
字をてる形を寺よりとりの苔六はさく大う教びとらゆ人の慈ひひて
なうらる儻侍より推きこのく身價るまばとらうらるハ徳のう人の

悠るり世貴をのいらば直馬をねと信づらしてそそのの無筆る
まばとらりなく勸を忘井に書しとまをな松がわらにひび
菘松漬くごちて肚巻の敷布より金十五両のまりをとり出して忘
井にまへる形を懐に挟つりやう寔に流るる一河小汲ひもその交
深く雨と一樹小遊をも思ひ殊に親しう母のくをりし思ひん
のるるとも又人の子あり今よりいふ不艶歎の生育の年まで信守の
勢とららば女児とて富家に遣嫁し二親と迎せらして老来
養すべしゆりて物と思ひの涙をなごめく暇を志のせま
もあはれ涙をば忘井のややく頭を擡不意家艱そ物の用いハ
まぬ推さるのを進するまば只家公の慈を願するのまをそ疱瘡

麻疹もくあやかしはま健にんえらから特病に蛇のけが朝熊の
万金丹いひひ差さる津國へ赴ていそま又便りらる近曾人言
侍中て買しそ彼茶のるわとて毛針箱の隅の傍まそやか女見
が腰の着さしそ護身囊にさし合てや常花の裡へ観世音の由
影もりの囊の裂れ母がまららば身が三丈の髪置に縫て被せり
丹甲山油のぬまらるはく鶴と龜との摺指に命長くれと祝し親の像見
るまば夫ひのまらるはく鶴と龜との摺指に命長くれと祝し親の像見
志死十八年八有馬の松の千年経るそまよりるるるるるるるるる
鏡のまらる世帯締りしとゆれ多て洗濯衣被更さし後びりて指つる
涙の濡らす水櫛のそにりる後髪も乱れそ物をまの顔の常花ハ

久しと母のあまのりたひふ^{オホク}病^{オホク}づらひの^{オホク}も。さうきた^{オホク}の^{オホク}より
看病^{オホク}の^{オホク}と。と思^{オホク}ひい^{オホク}と悲^{オホク}しくけり。より^{オホク}た^{オホク}とをい^{オホク}ひ^{オホク}暮^{オホク}ら^{オホク}そ^{オホク}い^{オホク}て
み^{オホク}ま^{オホク}ひ^{オホク}そ^{オホク}い^{オホク}ひ^{オホク}け^{オホク}目^{オホク}を^{オホク}押^{オホク}拭^{オホク}へ^{オホク}志^{オホク}井^{オホク}ハ^{オホク}毎^{オホク}に^{オホク}そ^{オホク}の^{オホク}怜^{オホク}制^{オホク}と^{オホク}人^{オホク}
ま^{オホク}に^{オホク}標^{オホク}致^{オホク}が^{オホク}他^{オホク}より^{オホク}て^{オホク}男^{オホク}を^{オホク}愛^{オホク}り^{オホク}て^{オホク}養^{オホク}父^{オホク}を^{オホク}救^{オホク}ふ^{オホク}孝^{オホク}行^{オホク}の^{オホク}を^{オホク}
誉^{オホク}ま^{オホク}す^{オホク}母^{オホク}の^{オホク}因^{オホク}果^{オホク}と^{オホク}い^{オホク}り^{オホク}に^{オホク}よ^{オホク}と^{オホク}は^{オホク}つ^{オホク}薄^{オホク}縁^{オホク}実^{オホク}相^{オホク}山^{オホク}の^{オホク}四^{オホク}鳥^{オホク}の^{オホク}別^{オホク}と
外^{オホク}に^{オホク}陰^{オホク}の^{オホク}驟^{オホク}雨^{オホク}に^{オホク}翅^{オホク}を^{オホク}ま^{オホク}ま^{オホク}と^{オホク}ま^{オホク}ね^{オホク}つ^{オホク}菰^{オホク}杖^{オホク}ハ^{オホク}の^{オホク}形^{オホク}容^{オホク}を^{オホク}そ^{オホク}外^{オホク}
面^{オホク}ま^{オホク}う^{オホク}て^{オホク}し^{オホク}る^{オホク}轎^{オホク}夫^{オホク}を^{オホク}招^{オホク}き^{オホク}入^{オホク}る^{オホク}に^{オホク}苔^{オホク}を^{オホク}ま^{オホク}と^{オホク}を^{オホク}い^{オホク}て^{オホク}常^{オホク}花^{オホク}を^{オホク}
ま^{オホク}つ^{オホク}杖^{オホク}乗^{オホク}す^{オホク}る^{オホク}轎^{オホク}の^{オホク}戸^{オホク}に^{オホク}ま^{オホク}つ^{オホク}る^{オホク}母^{オホク}と^{オホク}の^{オホク}退^{オホク}く^{オホク}磯^{オホク}と^{オホク}ま^{オホク}ま^{オホク}に^{オホク}擡^{オホク}出^{オホク}す^{オホク}轎^{オホク}
に^{オホク}後^{オホク}ま^{オホク}下^{オホク}と^{オホク}ま^{オホク}菰^{オホク}杖^{オホク}ハ^{オホク}草^{オホク}鞋^{オホク}と^{オホク}穿^{オホク}も^{オホク}ぬ^{オホク}が^{オホク}忙^{オホク}し^{オホク}げ^{オホク}ぬ^{オホク}走^{オホク}去^{オホク}る^{オホク}ぬ^{オホク}。

柳巷説話卷之一了

本^{オホク}傳^{オホク}り^{オホク}る^{オホク}日^{オホク}教^{オホク}井^{オホク}田^{オホク}屋^{オホク}を^{オホク}一^{オホク}路^{オホク}う^{オホク}と^{オホク}お^{オホク}き^{オホク}い^{オホク}

ま^{オホク}ま^{オホク}わ^{オホク}り^{オホク}る^{オホク}一^{オホク}切^{オホク}敷^{オホク}改^{オホク}り^{オホク}や^{オホク}ら^{オホク}お^{オホク}け^{オホク}
か^{オホク}子^{オホク}を^{オホク}送^{オホク}様^{オホク}の^{オホク}い^{オホク}ふ^{オホク}き^{オホク}い^{オホク}式^{オホク}ハ^{オホク}た^{オホク}だ^{オホク}と^{オホク}ま^{オホク}い^{オホク}
う^{オホク}ら^{オホク}る^{オホク}い^{オホク}ふ^{オホク}き^{オホク}い^{オホク}式^{オホク}ハ^{オホク}た^{オホク}だ^{オホク}と^{オホク}ま^{オホク}い^{オホク}
い^{オホク}ふ^{オホク}き^{オホク}い^{オホク}式^{オホク}ハ^{オホク}た^{オホク}だ^{オホク}と^{オホク}ま^{オホク}い^{オホク}
い^{オホク}ふ^{オホク}き^{オホク}い^{オホク}式^{オホク}ハ^{オホク}た^{オホク}だ^{オホク}と^{オホク}ま^{オホク}い^{オホク}
い^{オホク}ふ^{オホク}き^{オホク}い^{オホク}式^{オホク}ハ^{オホク}た^{オホク}だ^{オホク}と^{オホク}ま^{オホク}い^{オホク}

安井

